

---

# 誘拐事件

文月スグリ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

誘拐事件

### 【Nコード】

N7764B

### 【作者名】

文月スグリ

### 【あらすじ】

山之内刑事が、誘拐、殺人犯を推理する事件簿。

「それでは、誘拐事件があったのは、もう五日も前のことなんですか？なぜ、もつと早く警察に連絡をしてくれなかったんですか？」  
「だって、息子の、伸一の命が」

由美子は泣きながら、山之内刑事の質問に答えていた。無理も無い。子供が誘拐され、まだ行方不明のまま、拳銃の果てに、今朝、身代金を渡しに行ったはずの夫が、遺体で見つかるなんて。僕は、目を瞑って何かを考えている山之内刑事の隣で、泣き崩れる由美子を慰めた。

「刑事さん、息子は帰ってくるんでしょうか？」

泣きながら、必死の思いで、わずかな光を求めるような質問に、山之内刑事は何も答えなかった。きつと、誰もがこの事件に対して、最悪の結論を導き出していた。

「大丈夫です。きっとまだ生きていますよ。必ず我々警察が、犯人を捕まえ、伸一君を助けて見せますよ」

こんなとき、新米刑事である僕に出来ることは、わずかな希望を閉ざさないことだけだった。

それからしばらくして、由美子が落ち着いてきたのを見計らって、山之内刑事が口を開いた。

「藤田さん、辛い思いをさせて申し訳ありませんが、もう一度だけ最初から話してくれませんか？伸一君が誘拐されてから、犯人からの連絡、そして旦那さんの藤田勇夫氏が、どういう経路で河口湖に行ったかなど、この五日間で起きたこと全てを」

「山之内さん、さつき話してもらったことなら全部書いておきましたよ。ほら」

山之内は、僕を睨みつけた。まるで、余計な口出しはするなとばかりに。僕は、それ以上、口出しすることが出来なかった。

「お願い、できますかな？」

「はい」

小さく頷くと、由美子は、先ほどよりも弱弱しい声で、事件について話し始めた。

「事件があつたのは、五日前です。時間は、三時半頃でした。伸一が家に帰ってきて、遊びに行くつて出て行って十分もしないうちに、犯人から電話がありました」

「確か、犯人は、息子さんのケータイを使ったと」

「はい」

「それで、犯人はなんと行ってきたんでしたっけ？」

「息子は預かつた。返して欲しければ、300万円用意しろと。それから、警察に知らせたら、息子の命はないと」

「それであなは、警察に連絡をしなかつた」

「はい」

「犯人の声はどうでしたか？また、そのとき、雑音みたいなものは聞こえませんでしたか？」

「変えは、変声機を使つていて。雑音は、車の走る音しか」

「犯人からの電話の後、あなたは何をしましたか？」

「夫に電話をしました。伸一が誘拐された。早く帰つて来てと伝え、気がします」

「気がするというのは？」

「頭が、真つ白になつてて、なんて言つたかはつきり覚えていません」

「そうですか。そのあとは？」

「息子のケータイは。私のケータイから、大体の位置が分かるようになってるんです。だから、それで、どこにいるか調べようと思いました。でも、電源が切られていて」

「なかなか、頭のいいヤツですな」

「それで、分からないと知つたあなたは、次に何を？」

「とにかく夫を待ちました。私だけで、下手に行動して、犯人を怒

らせてしまったらって思ったので」

「で、勇夫さんを待ち続けたと？」

「はい」

「その間、犯人からの連絡は？」

「ありませんでした」

「なるほど、それで、旦那さんが帰ってきた後、あなた達はどうしましたか？」

再びメモを取る僕の隣で、山之内刑事は、腕を組み、目を瞑って上を見ていた。このポーズは、よく知っている。山之内刑事が、普通ではありえないことが起こった時、それが、なぜ起こったのかを考えているときのポーズだ。

「夫に、全部話しました。犯人から連絡があったことなど」

相変わらず、由美子は左手でハンカチを握りつつ、下を向いて、

目を覆っていた。

「それで、旦那さんはなんと？」

「警察には、連絡しないで置こうと」

「ふむ。それで、犯人からの連絡は？」

「八時ごろに、私の携帯電話に。今度は夫ができました」

「また、息子さんのケータイから？」

「いいえ、今度は非通知設定でかかってきました」

「それで、犯人と旦那さんは、どんなやり取りを？」

そのとき、山之内刑事のケータイが鳴った。

「ちよつと、すみません。はい、山之内だが。うん、何、それは本

当か？分かった。また連絡する」

「どうしたんですか？」

由美子は垂れていた首を起こし、真っ直ぐに山之内刑事を見つめた。

「息子さんと思われる人物が、保護されたそうです。自分で藤田伸一と名乗っているそうなので、間違いは無いでしょう」

「ああ。良かった」

また、由美子は泣き崩れた。今度は安心から、力が抜けたのである。

「それで、伸一は今どこに？」

「一応、検査のために病院に向かったそうです。ただ、それほど大きな怪我をしていないので、すぐに帰れるでしょう。」

「良かった。本当に・・・。」

由美子はそれ以上、言葉が出なかった。

「感激のところ、悪いんですが、伸一君に事情聴取をしたいのですが。なるべく早くに。犯人につながる手掛かりが、見つかるかも知れませんか？」

「はい。」

「では、今から、息子さんのいる病院へ向かいますよ。」

「お話の続きは？」

泣きながらではあるが、息子の無事の知らせは、由美子に安心を与えたのだろう。さっきまでとは打って変わって、余裕を見せた。

「なに、こいつが全部、メモを取っていたみたいなので、それを見ますよ。」

「伸一。」

我が子の無事な姿が目に入ると、由美子は、診断している医者を見逃すように、伸一に抱きついた。

「ママ。」

伸一も、母を強く抱きしめ、二人はしばし、泣きあった。

「パパは？」

五分くらい抱き合った後、違和感に気付いた伸一は、母に尋ねた。「パパは、後だね。それより、刑事さんたちが、伸一に聞きたいことがあるんだって。」

伸一の問いに、由美子は目を合わせることが出来なくなった。そして、病室から一人、出て行った。

「伸一君、無事で何よりだ。」

山之内刑事は、今まで見たことが無いほどの柔らかい表情を見せた。

「うん」

「さっそくで悪いんだが、君は、誘拐されたんだよね。いつ、どこら辺で誘拐されたか分かるかね？」

「うん、たしか、五日くらいまえに、友達の家に行こうとしたら、公園を過ぎた当りで後ろから来た車に乗せられて」

「何色の車だった？」

「黒だった」

「何か、犯人の特長とか覚えていない？」

「わからない。目隠しされていたし、手も足も縛られていたし、何も聞こえなかったし。あ、でも、車の中は、オレンジのような匂いがしたよ」

「他には？」

「うーん、でも、食事は温かくて、美味しかったよ。ぼく、から揚げが大好きなんだ」

「どんな食事だった？」

「から揚げとかだよ。誰かが、食べさせてくれたんだ」  
やはり子供だ。とても手掛かりになるようなことは覚えていない。そんなことを思いながら、僕は、手帳に『温かいから揚げ』と書き込んだ。

「車には、どれくらい乗っていたの？」

「わからないけど、かなりの時間乗っていたよ。そのあと、誰かに抱きかかえられて、多分、ベッドの上に連れられたの」

「伸一君、ありがとう。もういいよ。あとは、また今度にしよう。

今日は疲れたろう。ゆっくり休みなさい」

「うん」

病室から出ると、由美子が走って、僕達のほうに向かってきた。

「もう、いいんですか？」

「まあ、今日はね。伸一君も疲れていることだし。それにしてもさ

すがと言いますか、意外といますか、伸一君はしつかりした子供ですな。伸一君は、たしか四年生でしたな。子供子供と思っけても、四年生になると、大人びてきますな」

「はあ、それで、何か分かったんですか？夫を殺した犯人に繋がる手掛かりについて？」

「それはまだ、なんとも言えません」

「そうですか」

由美子は、夫を失った悲劇の妻から、復讐に燃える母に変わって来た。あまりの変わりぶりに、僕は思わず、半歩引いてしまった。

「なぜ、なぜ伸一君が誘拐されたと思う？」

部署に戻る車内で、山之内刑事が、僕に意見を求めた。今まで、この人の部下としていくつもの事件に立ち会ってきたが、そんなことは一度もなかった。僕は嬉しくなった。

「それは、やはり身代金が目的では？」

「はあ」

山之内刑事は、あからさまに大きくため息をついた。

「もっと、よく考えろよ。犯人は、最低でも二人いる。伸一君を攫ったヤツと、その車を運転していたヤツ。それで、300万を山分けか？」

「確かに、少ないですね」

「お前だったらどうする？できるだけ、大金をせしめる為に」

「そうですね。やはり、お金持ちの家の子供を誘拐します。その家の小さい子供を」

「どうやって、その家に金があると判断する？」

「やはり、家の外見ではないのでしょうか？」

「そうだ。その点では、藤田家はどうだ？」

「確か、あそこの近くには、高級住宅地がありました。じゃあ・・・」

「そうだ。お前、手帳に、事件の概要を書いているんだろう?」

「はい」

「もう一度、おさらいしてみる。重雄氏が帰って来て、犯人から連絡が来たところから」

「はい。由美子さんによりますと、犯人からの連絡は、重雄氏が取ったそうです。藤田家には、伸一君の中学受験のために、貯金がいくらあったのですが、300万はすぐに用意できないと話あったそうです」

「で?」

「三日以内に集めると、犯人に言われたそうで、結局足りない分は、金融機関から借りたそうです」

「その間、重雄氏は、仕事は?」

「はい、由美子氏に、自分はお金を集めるから、会社に休むと連絡させたそうです」

「金融機関で、重雄氏の姿は?」

「はい。確認が取れています」

「身代金の受け渡し方法は?」

「それが、高速道路を乗ったり降りたりして、河口湖の湖畔にと」  
「なぜわかる?」

「重雄氏が、由美子氏に逐一連絡をしていたそうです」

「お前は、なんで犯人は、そのような面倒なルートを選んだと思う?」

「警察が追跡しているかどうかを確認するためではないでしょうか?」

「ま、そうだな」

「それが、三日目の夜のこと、河口湖に着いたとの連絡を最後に、夫に連絡がつかなくなったので、四日目の夜に搜索願がでて、警察が河口湖を調べたら、湖の中から重雄氏が見つかりました。割と、湖岸近くにあったためすぐに発見できたそうです」

「死因は?」

「首を絞められていたそうです」

「そうだ。そして、今日、伸一君が帰ってきた」

「はい」

「で、もう一度訊くが、犯人の目的はなんだと思う？」

「・・・まさか、重雄氏の殺害ですか？」

「ぼくは、恐る恐る答えた。」

「そうだ。まず、間違いないだろう。では、犯人はどんなヤツだと思っ？」

「僕は、色々考えた。」

「最初から、重雄氏の殺害が目的なら、あえて伸一君を誘拐するなんて、理解できません。たとえ、それが重雄氏を人気の無いところに呼び出すのが目的でも、伸一君を生きて返すなんて、犯人にとつてリスクが大きすぎます。もし、伸一君が帰って来なかったら、たぶん、この事件は迷宮入りしていたでしょうし。そこから考えられるのは、重雄氏にのみ、恨みを感じており、伸一君のことも良く知っている、顔見知りの犯行では？」

「ああ、そうだな。だが、それだけでは確信がもてない。情が移っただけかもしれないしな」

自分でも、よく推理できていると思ったが、山之内刑事から見れば穴だらけなのだろう、しかし、ここで食い下がっては、また失望させてしまうと思い、手帳を見直した。

「・・・から揚げ」

「何？」

「から揚げですよ。温かいから揚げ、伸一君が食べたという。犯人は、最初から殺す気なんて無かったんですよ。拘束はしていたが、ベッドの上に寝かしたり、わざわざ温かい料理を食べさせたり、最初から用意してあったんですよ。それに、伸一君が発見されたのは、藤田家から、20kmほどしか離れていません。それから考えても、犯人は、リスクを負っても伸一君を無事に帰したいと思っていた人物です」

「よく分かったじゃねえか、そうだ。ただ、分からないのは、伸一君が、どこに拘束されていたかだ」

「そうですね。手掛かりがありませんし。ただ、それほど遠くではないと思いますが」

それから二日後、重雄氏の通夜が、しめやかに行われた。参列者達は、この不幸な親子に同情し、涙を流さないものはいなかった。

「それで、刑事さん、何かわかりましたか？」

皆が帰ると、由美子が近寄ってきた。

「何分、手掛かりが少ないもので。伸一君の携帯電話が見つければ、何とかなるのかもしれないが」

「そうですね」

由美子は、遅々として進まない捜査状況に、明らかに失望の意を見せた。

「ひとつ、確認したいことがあるのですが」

「为什么呢？」

「あなたは、重雄氏が、犯人の指示で、色々なルートを使って河口湖に行ったといいましたよね」

「はい」

「なんで、あなたはそれを知っているんですか？」

「主人から、連絡がありましたから」

「なんで、あなたに連絡を？いつ、犯人から連絡があるか分からないの？」

「さあ？でも、渡しに心配をかけたくなかったのでは？」

「なるほど。最後にもうひとつ、重雄氏は、誰かに恨まれるようなことは？」

「ありませんよ。あの人に限って」

「そうですね。関係ない話なんですけど、奥さんのご実家を訊いてもいいですか？」

「小田原ですが？」  
「なるほど」

犯人が逮捕されたのは、三日ごだった。動機はやはり、重雄氏へも恨みからだった。

「なぜ、あんなことを？」

「娘が、そして孫の伸一が可哀そうだったんだ。あの男は、浮気を何度も繰り返し・・・でも、娘の由美子は、伸一のためにと・・・」  
「犯行は、どうやって思いついたんですか？」

「私は、大学時代、推理研究会にいたんです。その時考えたものを」  
犯人、つまり由美子の実の両親は、涙ながらに犯行動機を語った。  
由美子の実家を家宅捜索した結果、三百万と、伸一君のケータイの入ったバッグが見つかったのだ。

「山之内さん、どうして、あの二人が犯人だって分かったんですか？」

「まず、由美子は、結婚指輪をしていなかった。あれほど頭の切れる犯人が、もし犯人だったら、そんな不注意を見落とすわけが無いと思っただ。それに、聞き込みをして回ったが、確かに、夫婦仲は冷め切っていたが、由美子さんに、浮気の話は無かった。だから、共犯者を見つけるのは難しい」  
「なるほど」

「そして、オレンジの香り、これは香水に間違いないだろうが、普通、そんな特徴的な匂いの香水をつけて犯行をするか？」

「いいえ」

「そう、だから、犯人は、何か特徴的な匂い・・・加齢臭を隠すために使っただと考えた」

「それで小田原に？」

「ああ。重雄氏の実家は、新潟だったしな。河口湖と、藤田家のある横浜の間に犯人のアジトがあると考えた。そして、横浜と、小田

原のレンタカーショップに聞いてみたところ、横浜の営業所で二人が、黒いワゴン車を借りていた」

「さすがですね。僕は、てっきり犯人は由美子さんだと思っていましたよ」

「だから新米なんだよ」

そういつて、山之内刑事はまた目を瞑って、下を向いた。その様子に、僕は、事件を解決したことへの喜びと、解決してしまったことに対する後悔を見た。

「刑事つてのは、辛いよな。どんな悲しい事件も解かなくちゃならねえ」

「でも、そうでない凶悪犯を捕まえられるのも、僕達だけですよ？」  
そういつて、僕は、届いたばかりの手紙を見せた。それは、以前、山之内刑事が捕まえた犯人に、母を殺された女の子から、感謝の手紙だった。

「そうだな」

それを見た山之内刑事は、立ち上がり、僕の方を向いた。

「これからも、鍛えてやるから、俺が引退したあとは頼むぞ？」

「あと十年は現役でいるくせに」

僕達は笑いあつた。この痛ましい事件を忘れず、しかし、引きずらないように。

突然電話が鳴った。

「はい、わかりました。山之内さん、事件です」

「よし、行くぞ。ちゃんとついてこいよ。」

今日も、山之内刑事の独特のポーズが、事件を解決するのであつた。

了

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7764b/>

---

誘拐事件

2009年6月23日10時34分発行